

日本みつばちの会だより

日本在来種みつばちの会

〒020-0886 岩手県盛岡市若園町3-10

養蜂具等のご注文は Tel:019-624-3001 fax:019-624-3118
みつばちの生態、飼育や当会の製品についてのご質問は、

★ 090-1060-6031 (会長 藤原誠太)まで。

当会の製品のご注文、入会・退会希望等については、

★ 080-8254-8033 (事務局)まで。

HP: <https://www.nihon-bachi.org> Email: hachinokai@fujiwara-yoho.co.jp

郵便振込 02320-7-23621 年会費3,800円

～本会は以下を目的として活動しております～

- ①ニホンミツバチの生態研究と保護繁殖
- ②ニホンミツバチを接点とする会員同士の研修交流
- ③ニホンミツバチを通しての自然環境保全と社会的貢献



令和4年度「日本在来種みつばちの会」定期総会記念講演会開催

令和4年度定期総会が、3月19日（土）、岩手県盛岡市「サンセール盛岡」にて開催されました。

3年目となるコロナ禍、16日の大地震による新幹線等の不通、当日未明の大雪により、開催できるかどうか危ぶまれましたが、岩手県を中心に20名程の会員（委任状名34名）が集まりました。

事務局の開会の辞に続き、藤原誠太会長より次の様な挨拶がありました。

「当会は創立33年になってきた。ご支持をいただき継続してこれだが、今後どうするかということも考えなくてはならない。若い人、新しい人が入り、老若男女が集う会になれば、ニホンミツバチの様々な研究課題を克服できるだろう。」

事務局がホームページをリニューアルし、フェイスブックを始めたことで、会員が増えることにつながればと思う。

3日前に、当会顧問を長年務め、私のミツバチの師匠でもあった父が亡くなった。最後まで『ミツバチを

大切にしないさい、この会は重要な会だから協力を続ける』と言ってくれた。」

議事は、及川雅彦氏（岩手県）を議長に選出して進められました。

第一号議案（令和3年度事業報告及び収支決算）について事務局より報告、収支決算は適正に処理されたとの監査報告が行われ、満場一致で可決されました。

引き続き第二号議案（令和4年度事業計画及び収支予算）が、事務局より報告され、承認されました。第三号議案（その他）は、特にありませんでした。

スムーズに議事が進行し、皆様の近況報告、ニホンミツバチについての質疑応答などで、有意義な時間を過ごすことができました。

その後、御園孝氏によるお話（2ページ参照）を聴き、最後に一般社団法人トウヨウミツバチ協会作成のビデオを見て、アンケート調査にご協力しました。

今年度も懇親会は開催せず、お茶とお菓子で歓談をしながら、自由解散となりました。

藤原会長による四季の飼育のポイント6回目

陽春〜初夏にかけての飼育上の問題点や注意点

今年の桜の開花は、早春の継続的寒気により、最早の記録ラッシュだった昨年より全国的に遅れた（北海道をのぞく）。その影響か、ミツバチの生育はニホンミツバチに限らず、職業養蜂家のセイヨウミツバチも、10日〜15日ほど成長が遅れ心配していた。温暖化が進行している中でも、各年の桜の開花状況は異なるから注意が必要だ。

今、ニホンミツバチでは、数日の内に何群も忽然と働き蜂の多くが消えるという現象が、各地で起き始めている。ニホンミツバチの「逃去」は、群がその場に居ると生命維持に問題が生じると判断し、一目散に巣を捨てて安全と思われ場所に移り住もうとする行動だが、これとは違う状況だ。

一昨年、私が飼育するニホンミツバチの群にも、それが起きた。アカリندانニの予防をしっかり行い、安心して春を迎えるところだった働き蜂が、殆んど数日で、あまり飛ばずに明るい方向にこぞって這いながら溜ま

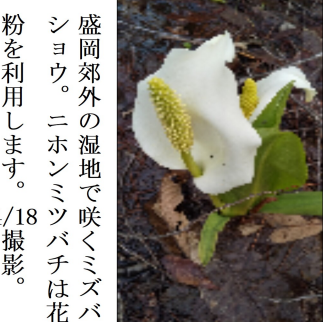
り、死んでいたのである。いろいろと調べてみたが、私見として、ある種の殺虫剤がわずかでも存在する環境で「ノゼマ微孢子虫」が感染すると、視神経を侵されるのか、短時間に自ら死期を悟り（？）わずかに見える明かりに向かつて弱々しく飛んでいたり、這いつくばって向かう。

その結果、自然環境（田畑や草むら、土などのある環境）では、この現象が起きてても死蜂が巣門周辺には見いだせず、あたかも、逃去と勘違いするのである。アカリندانニでの死に方も似てはいるが、かなりの死蜂や弱った蜂が、数日以上、巣門前に見受けられるという違いがある。

農薬（主に殺虫剤）の直接的被害の場合は、巣門前に外役蜂が舌をつきだして苦しみ、また、番兵蜂に味方なのに追い返されるので、盗蜜にきた他の群の蜂との小競り合い（盗蜂）と、しばしば勘違いしてしまう。

また、私が体験したことだが、ミツバチの分封を誘き寄せるための待ち箱を仕掛け、人工キンリョウヘンなども準備万端にしており、数日前から「偵察蜂」が待ち箱に執着を示していたの

に、突然、一匹も飛んで来なくなったことがある。これは勿論、分封群が飛来する道中に、他人に捕まることが有り得るし、急な悪天候で巣外に出られないまま、他の新女王蜂候補者に殺されてしまう等の可能性もある。しかし、その場合、その後数日間は何匹かの偵察蜂は、くせになつて



盛岡郊外の湿地で咲くミズバシヨウ。ニホンミツバチは花粉を利用します。4/18撮影。

るので飛来するのである。原因は、農業地域で行われる一斉の農薬散布と思われる。群そのものは、何とか生き残ったとしても、再起するには相当日にちが必要になり、二ヶ月もたった梅雨の合間や開けた頃、にわかには大群になり分封することに繋がるようだ。さらに、気になる情報として「蟻酸」でアカリندانニに対処しようとしたら全滅したとか、かなりの死蜂が出たとのこと。セイヨウミツバチと同じ量の処方ば、考え物と思われる。

記念講演 御園 孝氏
造園家 ニホンミツバチ愛好家
「野生トウヨウミツバチの
生息北限域と南限域」

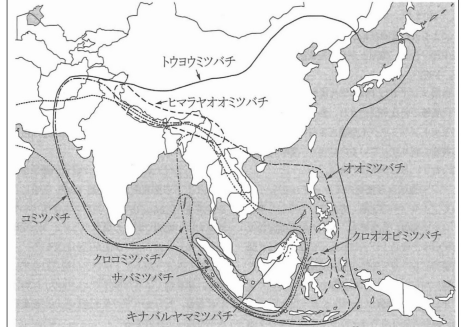
自己紹介を兼ねて、活動の一端を紹介する。

その時々を集まれる人達で、お墓につくられた果などの保護活動をしている。小菅にある東京拘置所に巣ができた時には、法務省から保護の依頼が来た。浅草の浅草寺には7群程いるのを把握している。

沓岐や対馬にも知り合いの養蜂家がいる。沓岐の女性養蜂家は75群飼育しており、生業として成り立っている。沓岐では蜜源植物を増やすことを心がけている。

一方、対馬の養蜂家達は蜜源植物の事はあまり考えていない。深い照葉樹林、つまり、もうあまり変化しない極相林となっているので、余計な蜜源植物を増やさなくて良いという考えだ。蜜源に関して、沓岐と対馬は対照的だ。朝鮮半島との距離はわずか49km、朝鮮式丸洞が多く使われ一人で100個置く人もいる。

韓国の養蜂家キムさんは友人で、私が対馬滞在中に呼ぶとすぐ来てくれる。キムさんは、韓国で一千群の巣箱（小型の重箱式）を持つ



ていたが、子出しで一時百群になってしまった。今は復活している。内検の仕方が独特で、巣箱をくると逆さにして中を見る。ソバと菜の花を広大な土地に交互に植えて、沢山の蜂蜜を採っている。

玉川大学の先生たちが作成した「野生のトウヨウミツバチ」の分布地図がある。青森が北限になっているが、私がロシアへ行った時、青森から500km北の宗谷岬の更に北の緯度あたり、タイガの森にもトウヨウミツバチはいた。南限域は東ティモール、私は両方を訪ねた。

2013年8月、タイガの森のクラスニール村へ行った。森は一見、ジャングルのようだが、福島県程の面積に600人程のロシア系モンゴロイドのウデへ族が住んでいる。真冬には零下40℃にな

り冬が半年間続く。夏は短く虻やブヨ、蚊が多いのに上半身裸の人が多かった。川は濁っているが栄養豊富で、オホーツク海から遠く三陸の海まで栄養を運び、漁場を豊かにするようだ。

藤原会長も以前この村を訪れており、村人は大酒飲みの会長をよく覚えていた。会長が、集落に分封して来た蜂を翅のH型によってトウヨウミツバチと確認したが、私は自然巣を見つけたかった。

川を3時間遡り、山を2時間行つて、ウダイカンバの根元にある自然巣を見つけた。樹皮がはがれた跡があり、これはヒグマが引つ掻いたり齧ったりした跡。この地の北は、オオカミ、ヒグマ、ツキノワグマ、南はアムールトラがいる。

セイヨウミツバチの養蜂場が3ヶ所あった。11月からは地下室に入れて越冬させ、4月に外に出すようだ。1ヶ所の養蜂場にアムールトラが来て、住民は眠れない夜を過ごした。トラとクマは神様だから、猟師も撃たないそうだ。3ヶ月後、そう語った猟師はヒグマに食べられて死んでしまった。零下40℃になる所で越冬できるのはなぜか。雪が1

m程積もり、それで寒さをしのげるらしい。もつと北にも生息していると聞いた。11月は冬なのに、7、8月の分封はあり得ないので、8月初めに6群分封した。7月にはアムールシナノキが蜜を出す。種に巣箱を載せて、1シーズンで4、5回、シナノキだけで採る。

「野生のブルーベリーを採りに行く」と言うので一緒にいった。ヒグマがベリーを食べに来るので、最低でも10人で行かねば襲われる。実はブルーベリーではなく、クロマメノキが見渡す限りなっている。30分でバケツいっぱいになったので、終わり。これ以上採ったらクマや鳥の分が無くなるから、ウデへ族の人達のすごさは、ほとんど自給自足の生活をしている事だ。福島県の広さを50人の猟師がテリトリーを決めて猟をし、獲物は自分や親戚が食べる分だけ獲る。イトウやマスも自分たちの分だけ獲って、換金はしない。店には肉と魚、野菜は売っていない。滞在の最後にアムールトラに出くわした。

南限域の東ティモールは20年前に独立したが、それ

以前に何ヶ国もの支配を受け、ひどい目に合ってきた。ビヤクダンの森があったが、焼き払われて数10万人が殺された。経済が不安定で、日本のパルシックという団体が有機コーヒー作りを指導し、日本でフェアトレードで販売している。

スタツプたちがコーヒーの花が咲くと、たくさんの野生ミツバチが訪花するのを見て、飼育してハチミツを収穫できないかと連絡があった。そこで、私は2013年5月と10月、東ティモールへ行き、野生ミツバチの飼育を手伝うことになった。

実際にコーヒーの花にはオオミツバチや野生のミツバチがたくさん来る。村の人は30mの木に登って、オオミツバチの巣を獲る。熱帯なので、幼虫入りの蜂蜜は、すぐに味噌の味になっ

てしまい、長持ちしない。オオミツバチの巣は180個位見つけた。ネムノキに似た花のモンキーポッドの木に巣が多い。大きい巣は幅1mほど、2、5万匹が付いている。このミツバチは、1kmも追いかけてくるそうだ。しかも刺されるとスズメバチと同じくらい痛い。赤道近くなのでバナナ、ポインセチア、ノニ、ピワ

が多くミツバチも多く来る。石垣の間やあちこちに野生ミツバチが住んでいる。この人達はミツバチを見つけると大人も子供も巣ごと獲って成虫以外食べ尽くす。人々に集まってもらい、巣箱作りをした。最初、重箱式的设计図を前もって送っておいたが、ここには製材所が無い。電気・水道・風呂・トイレも無い。そこで、蜂を捕まえるのが楽で、いくらでもある丸太をくり抜いて作った。皆、興味津々で取り組んだ。数個作って待ち受けとして森に設置。一つの集落に行くのに1日がかかりだが、7、8ヶ所の集落に行った。一カ所だけ、ドラム缶で飼育している所を見ることができた。

「ミツバチを飼うなら蜜源植物に興味を持ってもらいたい」と、現地の大学教授がフラワーフェスティバルを企画した。私が会場を花で埋め尽くす方法を提案し、飾りつけを担当した。

2年後、東ティモールから私に蜂蜜が届いた。彼の地で巣箱と丸洞によるトウヨウミツバチの養蜂が始まっているそうだ。

※御園氏からは、写真集とDVDを参加者全員にいただきました。感謝致します。

御園孝さん（埼玉県造園家）が解説する「蜜源植物の話」第47回目は「ナツツタ」です。

一年中葉を落とさない常緑のキツタは、植林したスギやヒノキに絡みつき木を弱らせてしまう森の嫌われ者です。以前は見つかるのが根元から刈り取られていたが、近頃は人手不足の影響で放置されています。

それに対して冬に葉を落とす落葉性のナツツタは結構人気があり、建物の壁や塀に這わせて建物全体を緑で覆いつくし、真夏の日差しを遮り室内を涼しくします。冬は葉を落とすので日差しで建物が温まります。

キツタは秋深まった時に、ナツツタは花の少ない夏に花を咲かせ、両者とも二ホンミツバチを喜ばせます。ナツツタは冬はツルだけの状態ですが、春に芽吹き淡い新緑が建物全体を覆ったときは目を見張る美しさです。ツルは吸盤でしっかりと壁に付き全体が剥がれ落ちることはありません。6〜7月に黄緑色の花を



たくさん咲かせると、ミツバチだけでなくスズメバチも訪花してにぎやかになります。秋に葉が美しく紅葉して、冬にすべての葉を落とします。寒さには相当強く北海道から沖縄まで、日本どこでも植栽可能です。蜜源植物を植えたいけれど、土地が狭くて断念している人にはかなりおすすめ。建物の壁や塀に這わせるだけで場所をとらずに花の少ない時期の蜜源が確保できるので。浅草寺には、以前確認したとき7群ほどの二ホンミツバチが営巣していました。裏の浅草寺病院の建物の壁一面がナツツタで覆われていて、二ホンミツバチが花の時期になると盛んに訪花していました。しかし、ナツツタの葉影にはスズメバチが巣を作ることもあるので、注意しなければなりません。残念な



ハンガリーのウアイダフニヤイ城

がら浅草寺病院のツタはすべて撤去されました。実は建物の外壁をナツツタで覆うというおしやれでレトロ感満載の手法は、ヨーロッパが主流です。オーストリアザルツブルグにあるミラベル庭園の長い壁いっぱいにはナツツタが繁茂していて、ちょうど沢山のミツバチが訪花していました（写真①②）。イタリアのメラノにあるトラウトマンドルフ城庭園には、崖に突き出た見晴らし台のデッキ部分がナツツタに覆われていて、その花にミツバチが乱舞していました。誰か気が付かないうちで（写真③）。

藤原愛弓さん（神奈川県理事 博士（農学））のレポート第23回目は「早春の蜜源・花粉源植物に関するお話」です。

この文章を書いている4月後半は、東北地方まで桜が満開ですね。

一般的に春の蜂蜜というクラなどの桜類の仲間が有名です。私たちはついつい蜂蜜が採れる植物の方に目が行きがちになりますが、ミツバチは、桜の開花する以前から咲いている様々な野の植物を利用しながら群れを成長させています。ミツバチの体は、主に花の蜜と花粉から成っていると

も過言ではありません。ニホンミツバチでは巣枠式などの可動式飼育でない限りは、春に蜂蜜を採ることはまずないと思えますが、早春に産卵が開始されてから、様々な蜜源花粉源植物を利用しつつ群れを成長させていき、それが分封への足掛かりとなります。

では自然界ではいったいどのような植物が、早春にミツバチの群れの成長を支えているのでしょうか？

それは例えば、桜が開花する前、3月に咲くヤナギ類が有力と思われる。ヤナギは日本に30種以上生育するとされており、いずれも代表的な先駆種（新しく開けた場所にほかの植物に先駆けて発芽・成長する種）で、道路端の林縁や河畔などでよく見かけます。

私が大学院生の時に、岩手県の調査地で3月にニホンミツバチが持ち帰っている花粉団子を予備的に調べたところ、ヤナギ類の仲間が多く検出されました。

例えば、林縁に生育し最大15m程の太木となるヤマネコヤナギ（ハッココヤナギ）は、早春に黄色い花をたくさんつけます。まとまった開花があまりないこの時期にはミツバチたちにとって

はありがたい花でしょう。まだ早春で餌が少ないため、ミツバチのほかにも鳥や動物たちも食料として利用します。

また、河原などに生育し、銀色の花穂が美しいため生け花などで用いられるネコヤナギの花も、よくよく見ると、ミツバチが訪花しているのを見つけたことができるかもしれません。また、公園などに植栽されるシダレヤナギのように街中で見かける種もあります。

このように、3月のまだ寒さが残る時期にも、様々な場所ですりそりとミツバチの命を支える植物たちが花を咲かせています。ぜひ皆さんも、自分たちの飼育しているミツバチがどこで蜜や花粉を集めているのか？と思いを馳せてみてください。



ヤナギの仲間。一般的なのはカワヤナギ。蜜も花粉も出る。